

ウート・ウーギとバイオリンの森

私が持っているバイオリンは、1744年製グアルネリ・デル・ジェスと1701年製ストラディヴァリウスです。後者は、ベートーベンが有名なソナタを献呈した音楽家の名にちなんで「クロイツェル」と呼ばれます。この2台のバイオリンはそれぞれ個性を持っています。前者は、熱い音色、奥深く、官能的な響きを持ち、ロマン主義に近く、まるでフランドル画派の絵画のようです。後者の方は均整のとれた声を持ち、イタリアのルネサンス絵画というか、ベアート・アンジェリコのようなものを言えるでしょう。どちらも、トレンティーノ県で産出した高級な木材で作られています。」と語るのは国際的に有名なバイオリニストであるウート・ウーギです。彼の言うとおり、美しいサン・マルティーノ山脈裾野にある、ドロミティの中心にパネヴェッジオという森があり、そこでは共鳴のトウヒという特殊な赤トウヒが育ちます。これは、希な種で、何百年も前からバイオリン、ピオラ、チェロ、ギター、ピアノといった弦楽器の振動響板を生産するために使われてきました。この種の赤トウヒは、音波を調和よく伝える性質を持っています。それは、節や割れ目がなく、引き締まった一様性のある木目を持っているからです、特に幹の年輪の特性によります。赤トウヒ材は、柔軟性に富み、音をよく伝えます。そして、樹液が流れる導管がパイプオルガンのパイプのような役目を果たし、「共鳴」を生み出すのです。赤トウヒの特殊性は、ストラディヴァリ、グアルネリ、アマティといったクレモナの弦楽器作り師たちにもよく知られていました。彼らは、バイオリン制作に使うための最高の共鳴のトウヒを求めて18世紀にこの森を探索したのでした。ラゴライ山脈、サン・マルティーノ山脈、ボッケ山脈の間を海拔1400 mから2150メートルの高さで流れるトラヴィニョ口急流の扇形盆地に約2700ヘクタールの面積で広がる、壮大なパネヴェッジオの国有の森、そのの中にこの「バイオリンの森」があります。

ウート・ウーギは、1701年製ストラディバリウスが作ったバイオリン（ヴァン・ホーテン＝クロイツェル）を使って、「ドロミティの音」という催しの中で、パネヴェッジオの森にあるカリゴレで2回のコンサートをしました。ここは、それ以来、「ウート・ウーギの野外コンサートホール」と呼ばれています。これは、長いキャリアを誇るウート・ウーギに与えられた多くの賞のひとつに過ぎません。

ウート・ウーギは1944年にブスト・アルシツィオに生まれ、5歳の時にバイオリンを始めました。ウート・ウーギは次のように説明しています。「当時、私は《天才》と考えられていました。でも、私は家に音楽がある環境で育ちました。私の祖母はピアノを弾いていましたし、母は音楽を、父はバイオリ

ンを勉強しましたので、私にとってミラノのスカラ座劇場で7歳で初リサイタルを開くのは、自然なことでした。曲目は、バッハの「シャコンヌ」とパガニーニのカプリッチョの数曲でした。10歳のとき、私はパリに留学をしに行き、当時の大作曲家のひとりで、バイオリン奏者、ピアノ奏者、指揮者であった、ルーマニア人のジョルジュ・エネスコに師事するという幸運を得たのでした。彼は素晴らしい人物で、世界観を備えた音楽家であり、計り知れない想像力の持ち主でした。残念なことに、私はまだ幼く、未熟で、彼の凄さをとことんまで理解することができませんでした。でも、私は、彼から得た深い情感、感動、本能を決して失ったことがなく、今も持ち続けています。彼が亡くなった時、私はまだ12歳でした。その後私は、ジュネーブで、そしてウィーンで音楽の勉強を続けました。」

その頃既に、批評家たちは芸術と技術において成熟したコンサート奏者としてウート・ウーギを大きく認めていました。「私の成長にとって、オーストリアの文化は決定的なものがありましたが、音楽家にとってそれは当たり前だとされています。偉大な器楽は、バッハ、ベートーベン、モーツァルト、シューマンのおかげで、ドイツ語圏で発達したからです。」ウーギは若い頃からヨーロッパの主要劇場で大演奏ツアーを始めました。それ以来、彼のキャリアは休止することはありませんでした。彼は世界中の有名なオーケストラとともに演奏しました。中でも、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団、ボストン交響楽団、ニューヨーク・フィルハーモニック、ワシントン・ナショナル交響楽団があります。指揮者としては、バルビロリ、ビシュコフ、チェリビダツケ、クリュイタンス、チョン、コロシ、デービス、フリーベック・デ・ブルゴス、ガッティ、ゲルギエフ、ジュリーニ、コンドラシン、ンソンス、ライトナー、ルラ、インバル、マゼール、マズア、メータ、長野、ペンデレツキ、プレートル、ロストロポービッチ、サンデルリング、サージェント、サヴァリッシュ、シノーポリ、スラットキン、スピヴァコフ、テミルカーノフを得ました。「ソロ奏者」としては、ミラノ・スカラ座劇場、ヴェネチア・フェ



ニーチェ劇場、パリ・オペラ座劇場、ニューヨーク・メトロポリタン劇場、東京芸術劇場などの舞台で演奏しました。ウート・ウーギはまた、ビルマのバガン遺跡、アマゾンの森、パネヴェッジオの森など、素晴らしい自然に囲まれた中でもコンサートをしています。

ウート・ウーギは、CD制作や演奏ツアーを多くこなしていることからイタリアのバイオリン界の最高の代表者のひとりとして、また、最も重要な現代奏者のひとりとして考えられています。加えて、イタリア社会でも活躍し、特にイタリアの音楽遺産の保存と若い世代への音楽の普及に力を入れています。「これらの目標を達成

するために、私は、「ベネチアに捧げる」、「ローマに捧げる」、「ローマのためのウート・ウーギ」フェスティバルなど、フェスティバルや音楽の催しを創設したり、出演したりしてきました。イタリアは芸術的活動において世界で屈指の国です。私たちイタリア



「ドロミティの音」コンサートの中でのウート・ウーギ

パネヴェッジオにある「バイオリンの森」



人は世界の芸術遺産の中心にいます。でも、音楽のカルチャーがありません。コンサートにやって来るのはますます年が取った人ばかりになってきています。若い世代はある種のコンサートにしか行きません。若い人たちを刺激する、それが唯一の道です。さもないと、10年後には私たちのコンサートにやって来る人はいなくなるでしょう。私は環境や自然の保護のためのキャンペーンにも興味を持っています。自然がなければ、命もなくなり、想像力もなくなるでしょう。木や花、葉の美しさを考えましょう。これらは自然の中にある芸術的傑作です。芸術は自然の模倣以外の何物でもありません。時には自然を高揚し、超越したりします。しかし、自然はすべての芸術インスピレーションの源泉であり続けます。たとえば、ゲーテやベートーベンなどの偉大な芸術家に想を与えた森があります。完全な芸術とは自然の創造であり、ひとつの植物の完成と調和なのです。これが理由で、数年前に「音を奏でる森」という催しで演奏したときに私は感動しました。私は、トレンティーノ県のパネヴェッジオにある「バイオリンの森」で、共鳴の赤トウヒ1本を選んでそれに私の名前を与えることができました。私は自分に似ている木を選びました。それは、小さな平面に根を張り、他の木からは近過ぎることも遠過ぎることもなく、ひっそりと邪魔をすることなしに、他の木といつしよにいつことを楽しんでいるような木です。地元の役所は、「私の森」に札を付けました。そこには私が誇りに思うことが書かれています。《この森の私たちトウヒは、あなたの心と芸術のおかげで、調和と強烈な振動を表現することができました。マエストロ・ウーギ、ありがとうございました！》

GianAngelo Pistoia

ジャンアンジェロ・ピストイア

Concept & design: GianAngelo Pistoia

Photos: Fototeca Trentino S.p.A. -

Ronny Kiaulehn - Carlo A. Turra -

GianAngelo Pistoia/A.P.

共鳴のトウヒで演奏し、自分の共鳴のトウヒを抱くウート・ウーギ

